

震災と藻場

2011年におきた東日本大震災は、海中にも大きな変化をもたらしました。水産総合研究センターは、震災直後からその影響の調査をしています。ここでは、藻場が受けた影響の調査結果を紹介します。

アラメ場の変化

震災前

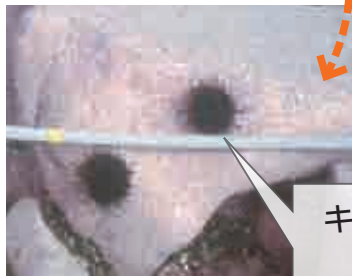
宮城県牡鹿半島の岩礁では、東日本大震災の前は、水深3メートルより深いところでは、キタムラサキウニがアラメなどを食べつくしていたため、アラメ場はありませんでした。波の影響などでキタムラサキウニが入り込めない3メートル



よく見てみると…

写真1. 震災前の岩礁

水深3メートル（黄色い線）より浅いところにアラメ場があり、それより深いところにはアラメが生えていません



キタムラサキウニが生息

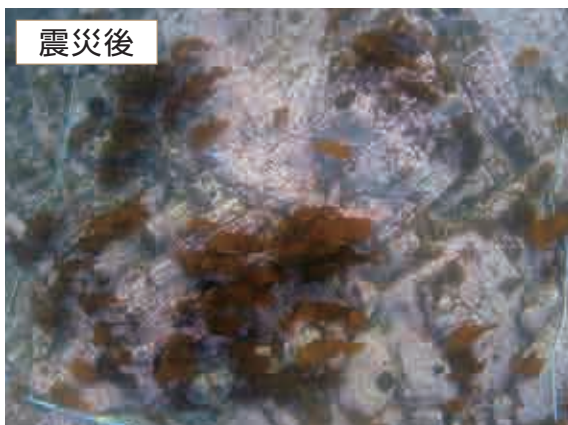


写真2. 震災後に芽吹き始めたアラメやホンダワラ

震災の大津波で多くのキタムラサキウニが流され、その後、岩の表面にアラメやホンダワラ類が芽吹き始めました。これらの海藻は、ウニがいなくなったことで食べつくされずに生き残ることができたと考えられています。芽吹いた海藻は現在も成

より浅いところには、アラメ場がありました。

震災後

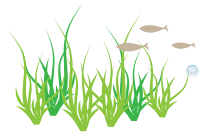


写真3. 宮城県鮫浦湾

震災前（左：2010年6月2日撮影）にあったアマモ場（点線部分）が、震災後（右：2011年9月8日撮影）にはほとんどありません

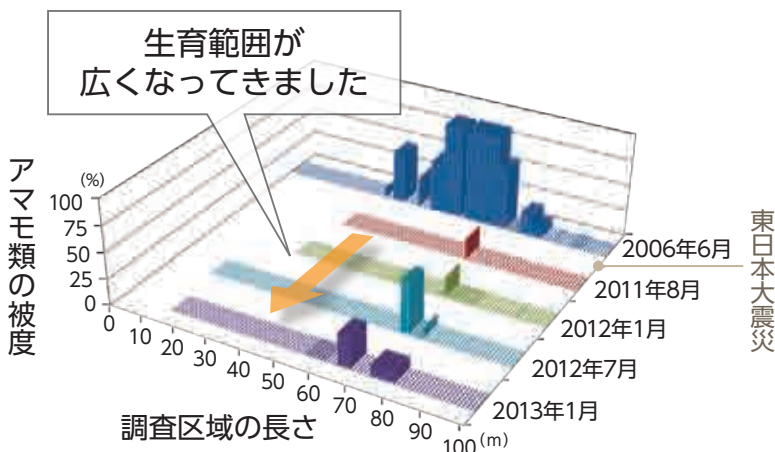


図. 鮫浦湾のアマモの被度

調査区域を定めて、そこに生えているアマモが占める面積の割合（被度）を示した図です。この結果は、石巻専修大学の玉置仁博士との共同研究によるものです

アマモ場の回復

アマモは、海が荒れると流失することがあります。東日本大震災の大津波は、東北沿岸の鮫浦湾など多く

長し続け、アラメやホンダワラ類の藻場が拡大を続けています。

のアマモ場に大きな影響を与えました（写真3）。牡鹿半島東岸の鮫浦湾は、太平洋の震源地側に向いています。そのため、大津波が直接内湾まで入り、

アマモ場を根こそぎ流失させたと考えられました。震災以前（2006年6月）の調査結果では、広い範囲にアマモが高い密度で生えていたことがわかります（図）。

震災後の11年8月の調査

では、ごく一部を除き、アマモがほとんど残っていませんでした。その後の調査から、震災以前の状態には遠く及びませんが、わずかずつ生育範囲が広がっていることが分かってきました。